オーディオ論壇収載

アナログと最新ディジタルの比較試聴から見えてきたこと(2)
－最新録音によるアナログ盤－

１．前報(1)の要約

K 氏と S 氏が来訪されて拙宅のシステムを試聴されていたときのことですが、K 氏から、「アナログ再生は、まるでカセットデッキのようだ。」という発言が飛びだしました。

改めて考え直してみますと、アナログは製作当時の再生システムの能力を考慮して、ダイナミックレンジを欲張らないよう、リミッターを通していますし、カートリッジやアームの追随性を考慮して、高域も低域もフィルターを通してカットしているはずです。

一方、ディジタルは、技術の進歩とともに、入れ物自体が大きくなっていますので、小さい入れ物に押し込める必要がなくなってきています。

なお、システム上の特徴を見直しますと、アナログではカートリッジは最新の高級機ですが、アームは 40 年以上の前のもので、追随性に問題がありそうです。また、ケーブルについては、アナログにはプレイヤー標準品のフォノケーブルが残っています。さらに、ディジタルはディジタルアキュライザーや USB アキュライザーをフル装備していますが、アナログ系にはそういったデバイスはありません。

なお、アナログソフトについては、1980 年代のディジタル録音のアナログ盤に広帯域の片鱗を見せてくれる盤があることを経験しています。

２．新しいアナログソースの探索

問題は、再生システムに由来する要因とアナログ盤の製作過程に由来する要因が考えられますが、再生システムのハードの問題は置いておき、ソフトについて、できるだけ狭い入れ物に押し込めていない、現代のアナログ盤がないかどうか、調べてみることにし、次のようなアナログ盤を入手して聴いてみました。これらは、いずれも、ディジタル録音で、発売は最近のものです。

作曲家：ヨハン・シュトラウス 2 世他

曲名：ワルツ「南国のバラ」作品 388 他

演奏：リカルド・ムーティ指揮ウィーンフィル

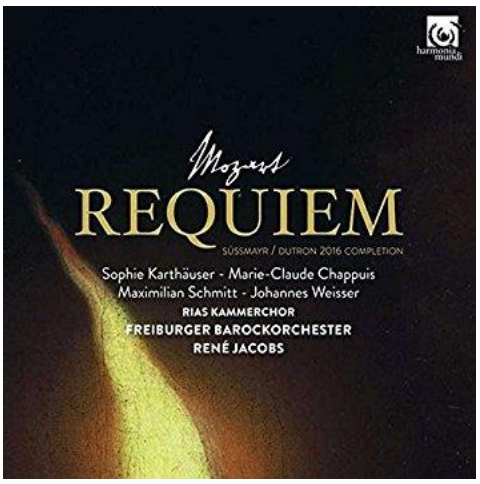
発売：SONY（2018 年発売）

No. ：88985477321

ディスコグラフィー【2019No.121】にて報告

作曲家：バッハ
曲名：ヴァイオリン協奏曲１番イ短調他
演奏：ヒラリー・ハーン（Vn）
ジェフリー・カヘイン指揮ロスアンゼルス室内オーケストラ
発売：ドイツグラモフォン（2003 年発売）
No. ：4835219
ディスコグラフィー【2019No.119】にて報告

作曲家：モーツアルト
曲名：レクイエム
演奏：Rene Jacobs 指揮フライブルグバロックオーケストラ
発売：harmonia mundi（2017 年発売）
No. ：B07587WM93
ディスコグラフィー【2019No.120】にて報告



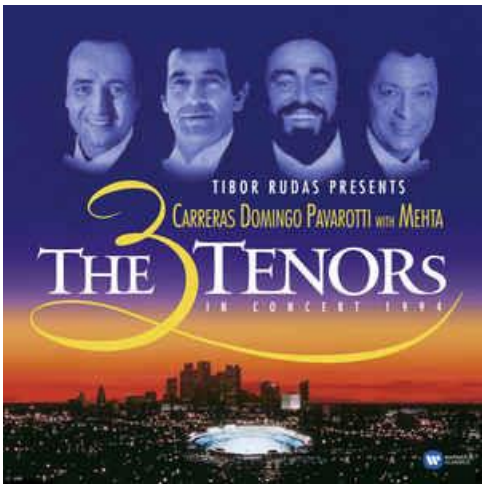
盤名：3 大テノール

演奏：ホセ・カレーラス／プラシド・ドミンゴ／ルチアーノ・パバロッティ
　　ズビンメータ指揮ロスアンゼルスフィル

発売：WARNER CLASSICS（2017 年発売）

No. ：0190295871871

My Sonic Signature Gold の活用(22)にて報告



以上の試聴結果は、それぞれ上記の報告どおりですが、これらを要約すると、ディジタル録音のクオリティがよく、極めて明晰で音の分離が良く、その結果、曲の全容を隅々まで捉えられ、楽器の質感も従来のアナログ録音と同様に自然になってきており、新しい時代のアナログ盤の魅力を示してくれています。

3．まとめ

最近はアナログマスターから DSD や MQA にリマスタリングしたり、ディジタルマスターからアナログ盤が制作されたりするようになってきています。そのため、従来のような単純なアナログ対ディジタルのような図式では判断できない要素もあります。

上記の例は、まさにそのようなもので、最新のディジタル録音から製作されたアナログ盤は、上記のライブルグバロックオーケストラのレクイエムのように、アナログ純血主義を脅かすところもあります。従って、前報(1)での K 氏の指摘の要因として、アナログ盤の製作過程の問題もあると言えます。
なお、一方の再生システムの問題点については、対策を検討中であり、追って経過を報告していきます。

以上